

講演中に回答できなかった質問への回答

1. **Q:ご両親ともに食関係に携わっていらっしゃったとのことですが、何か研究につながったこととかありましたか？**

A:この件、無かったと回答しましたが、個人研究はいろいろやったのだと思います。がんちくは語れないけど、とくに美味しいものを見分ける舌は開発できたかと。そして、どの食事も美味しく食べられます。仕出し屋として鍛えられた、後片付けの躰けはいまも有効です。また、サイエンスとしての料理の面白さについてのセンスを磨けたと思います。

2. **Q:『やさしさに包まれた』未来社会を作っていきたいと思っておりますが、このやさしさに包まれたらメッセージは、というくだりで、このやさしさも、情報学が提供できるとしたらどのような形になることをお考えでしょうか。**

A:まず個人の「意・情・知・体」に沿った内部モデルを構築することではないでしょうか。動機、意図、感情、知識、慣習、技などの仕組みをもっと精緻にモデル化したいところです。それが推定できたうえで、相互インタラクションモデルを組み立てて共感、アドバイス、共創のための手段を構築するというような共生コーチングを思い描いていますが、どうでしょうか？インタラクション理解によって個人モデルの推定をすることになり、両モデルの同時推定になるかもしれません。

3. **Q:研究評価、特に「これからの研究」を評価することを長くされていらっしゃいますが、間瀬先生にとって、研究の価値ってどんなことでしょうか？**

A:研究評価のときの価値観は、自分自身の尺度で面白いと思う課題を高く評価しています。なるべく広い視野で評価しようとしていますが、最後は、その提案のアウトカムに共感するかどうかです。では、その価値観は何かというと、一言では言い切れません。私の中に複数の評価基準があって、それらがお互いに戦っているSociety of Mindのような世界だと思います。どういう価値基準のエージェントがいるかということ、たとえば、自分自身にとってもしあつたら嬉しい技術やサービス、期待されるアウトカムが社会に新しいものを投げかけるもの、方法論やプロセスが広がりを持つポテンシャルがあるもの、だれもやっていないこと、誰か困っているところに手を差し伸べる、などでしょうか。

貴重なご質問ありがとうございました。